ASLE-Japan／文学・環境学会

NEWSLETTER

The Association for the Study of Literature and Environment in Japan

December 15, 2011, No. 31

【役員名簿（2010-2012）】（五十音順）

代　表：村上　清敏（金沢大学）
副代表：喜納　育江（琉球大学）
顧　問：上遠　恵子
　　西村　頼男（阪南大学(非)）
事務局長：豊里　真弓（札幌大学）
事務局補佐：
　　高橋　綾子（長岡技術科学大学）
　　波戸岡景太（明治大学）
会　計：平塚　博子（敬和学園大学）
　　林　　直生（滋賀大学）
監　事：上岡　克己（高知大学）
ニューズレター編集委員：
　　辻　　和彦（近畿大学）
　　塩田　　弘（広島修道大学）
　　山本　洋平（戸板女子短期大学）
会誌編集委員：
　　中川　僚子（聖心女子大学）
　　木下　　卓（愛媛大学）
　　小谷　一明（新潟県立大学）
　　加藤ダニエラ（中南財経政法大学・中国）
　　高橋　龍夫（専修大学）
コンピューターセンター：
　　岩政　伸治（白百合女子大学）
　　山城　　新（琉球大学）
評議員：Bruce Allen（清泉女子大学）
　　池田　志郎（熊本大学）
　　石幡　直樹（東北大学）
　　岩政　伸治（白百合女子大学）
　　太田　雅孝（大東文化大学）
　　茅野　佳子（明星大学）
　　管　啓次郎（明治大学）
　　高橋　勤（九州大学）
　　高橋　昌子（三重大学）
　　巽　　孝之（慶応義塾大学）
　　田中　恒寿（札幌大学）
　　結城　正美（金沢大学）
　　横田　由理（前・広島国際学院大学）
　　吉田　美津（松山大学）
院生代表：山田　悠介（立教大学・院）
広　報：大野　美砂（東京海洋大学）
　　河野　千絵（日本大学（非））
　　喜納　育江
研究助成：岡島　成行（日本環境フォーラム）
　　高田　賢一（青山学院大学）
　　乳井　昌史（早稲田大学）
　　山里　勝己（琉球大学）
　　野田　研一（立教大学）
　　村上　清敏（代表）
　　喜納　育江（副代表）

任期残り一年をきって

代表　村　上　清　敏（金沢大学）

この夏、代表をお引き受けしてから三度目の全国大会を迎えた。清里大会、新潟松代大会に続く、今回の明治大学生田校舎大会がそれである。清里では野田さんはじめ立教大学関係の方々に、新潟松代では、小谷さん、高橋綾子さん、平塚さんにそれぞれお世話になったし、今回は、管さん、波戸岡さんはじめ明治大学院生の方々のお力添えを賜った。大会の詳細は本紙での報告記事に譲るとして、駅から徒歩十数分、小高い丘に建つ瀟洒な校舎の、これまた立派なホールでの大会は、今福龍太氏の講演、地元の歴史や文化を記録したドキュメンタリー映画の上映、アイヌの方の貴重な文化遺産の証言、若手研究者や院生の方々を中心とした熱のこもった研究発表など、なかなかに充実した内容であった。毎朝、校舎の玄関にシーベルト表示が掲載されるという状況の中での大会開催であり、大会実行委員の方々には並々ならぬご苦労をお掛けしたことと拝察する。この場をお借りして、あらためて御礼申し上げたい。

さて、来年度の全国大会の会場については、役員会から近畿大学での開催が提案され、総会でも承認された。大会実行委員長はニューズレター編集委員の辻さんにお願いし、関西在住の会員の皆様のお力添えを仰ぐこととなった。すでにフィールドトリップの心配をする気の早い人もいて、大阪ミナミの夜の探訪派と奈良に足を伸ばす健全派とで意見が分かれている。両方やったらどうだ、との無責任な少数意見もある。いずれにせよ、その近畿大学大会では、代表、副代表以下、大幅な役員入れ替えをお願いしなければならない。ぼくがこうした駄文をご披露するのも今回を含めて、残り二回となったというわけである。そこで、代表としての任期残り一年をきったこの時点で、本会が抱える問題点を以下に列挙して、新たな役員体制を構築していただく際の参考に供したいと思う。ただし、役員会や総会で話題になっているもののみならず、日頃個人的に思っているものも含まれているのでご了承願いたい。

1 会計の健全化

ご承知のとおり、現在のところ会計は逼迫した状況にはないが、生田前代表の代に産み出してくださった剰余金を村上の代になって、毎年10万円以上取り崩しているという現実がある。こうした現状が続けば、近いうちに財政の破綻が懸念される。したがって、たとえば支出の多くを占める会誌出版にまつわる出費を低く抑えられないか検討するとともに、場合によっては、会員の皆様に事情をお話しして、会費の改定をお願いしなければなるまいと心配している。今回からニューズレターに広告を掲載することとなり、多少の掲載料の収入は見込まれるものの、それに過剰な期待をすることはできまいと思う。

2 ホームページの件

本件に関するぼくの理解は、どれだけ説明を聞いても、五里霧中のままであるが、伺うところでは、歴代のコンピューターセンター委員の方々のご努力、ご尽力にもかかわらず、あまり使い勝手が良いとは言えないらしい。こうした時代であるからして、ホームページは、会誌、ニューズレターと並んで、本会の顔となるべき存在であるにもかかわらず、もしもそのような現実があるとするなら、これを放置したままにすることはできまい。村上を外して、喜納副代表を座長とする検討WGを役員会の中で早急に設置してもらい、来る５月の役員会までには答申案を提示してもらえればと願っている。

3 ニューズレター、会誌投稿の活性化

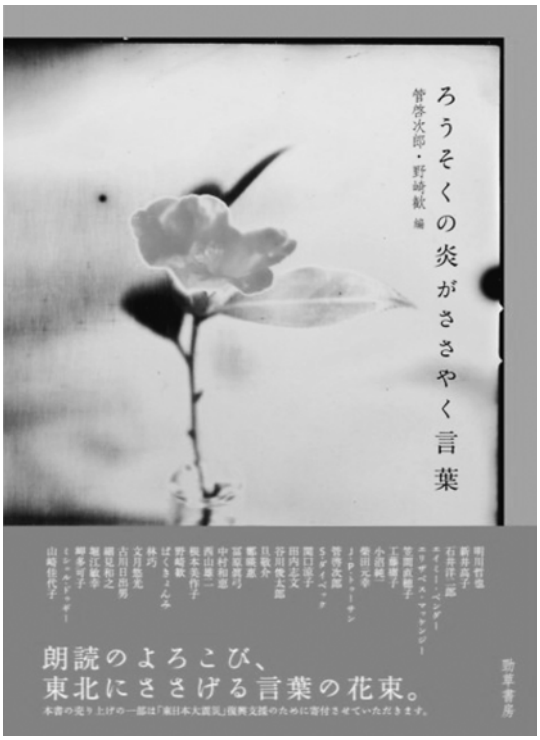
本件に関しては、これまでの役員会でもたびたび話題になっているが、これといった解決策が見いだせないまま今日にいたっている。まず、ニューズレター記事の投稿に関して言うなら、編集委員の方々は毎回原稿集めに四苦八苦なさっているというのが実情である。会誌が研究成果発表の場だとするなら、ニューズレターは会員の交流の場として位置づけられるだろうから、編集委員が困るくらいの投稿を期待したい。また、編集委員会でも、「会員の交流の場」としてのニューズレターの性格が前面に出るよう、新たな企画を検討するなど、引き続きご尽力願いたい。

会誌について言えば、投稿規程の改正をとおして、会員の皆様が投稿しやすくなるよう配慮を重ねたつもりだが、まだまだ十分な成果があがっているとは言い難い。編集委員会が慫慂論文の心配までしなくて済むようにならないものか。また、編集委員会としても、小特集を組むなり、全国大会での口頭発表の成果を何らかの形で生かすことも含めて、投稿数の増加に引き続きのご尽力をお願いしたい。

4 出版企画の検討

野田さん、山里さん、生田さんの代には、会としての出版物をそれぞれ世に問うたのに対して、村上の代ではそうした成果が何もないことに、今頃になって気がついた。研究助成委員の一人としても、会員の皆様にはまことに申し訳なく思う。遅まきながら、来る５月の役員会までには出版WGを編成して、新たな出版物の企画・推進にあたってもらう手はずでいる。できれば、会の創立20周年を迎える2014年には、会としての出版物を上梓できるよう願っている。

最後に、今回の全国大会会場では、管啓次郎・野崎歓編『ろうそくの炎がささやく言葉』（勁草書房、1800円＋税）が展示・即売された。帯には「朗読のよろこび、東北にささげる言葉の花束」、「ろうそくの炎で本を読もう。31人の書き手による詩と短編のアンソロジー」とある。朝の早いぼくは、朝刊が届く前に、ろうそくの炎ならぬ薄明を頼りに本書を毎日少しずつ読んだ。なかでも、冨原真弓、「樹のために――カリン・ボイエの詩によせて」には胸が熱くなった。



◉大会報告

第17回ASLE-Japan／文学・環境学会

山　田　悠　介（立教大学院）

2011年８月26日～28日、小田急線の生田駅から歩いて約10分の小高い山の上に聳える明治大学生田キャンパスにおいて、第17回ASLE-Japan ／文学環境学会全国大会が開催された。キャンパスの入口から校舎へと続く登校路と呼ばれる坂道は濃い緑に囲まれており、８月下旬の厳しい暑さを少し和らげてくれるようであった。

全国各地から続々と会員が集まり、村上代表の「開会の辞」で幕を開けた大会第一日目。「研究発表1」では、立教大学大学院博士後期課程の中村優子氏と明治大学大学院博士後期課程の清岡秀哉氏のお二人が発表された。中村氏は、「〈空（そら)〉という表象：そのコミュニケーション機能についての試論」と題し、スティーブン・カーンの言う「積極的消極空間」の概念を参照しつつ､現代日本のマンガと広告における｢空間」および「空」の表象について論じられた。清岡氏のご発表、「〈金継ぎ〉をめぐって」では、「金継ぎ」という日本独自の美的表現とその技巧に焦点が当てられ、日本人の環境（世界）に対する関係性構築の有様の一端が明らかにされた。両氏のご発表は、日本文化における「空間」あるいは「間」のもつ意味を問うという点で重なりあう部分が少なくなく、非常に興味深いものだった。

「研究発表１」に続き、「同化政策が奪えなかったもの～浦河の自然と両親の生きる姿が教えたアイヌの心～（山・川・海の食文化、ものづくり、カムイノミとイチャルパ、そしてヤイサマ)」と題された「ワークショップ」が行われた。明星大学の茅野佳子先生が司会を務められたこのワークショップでは、北海道浦河出身の浦川治造氏にお話を伺った。関戸勇氏の写真を交えながら、ご自身の幼少期の出来事や、近年携わっておられるというアイヌの儀式を甦らせる運動について語る浦川氏の言葉ひとつひとつに、アイヌとして生きることの困難と誇りを感じられた参加者も多かったことだろう。

「基調講演」では、文化人類学者、批評家であり、東京外国語大学大学院で教鞭をとられる今福龍太氏にご講演いただいた。「Nature’s Writing――種子のなかの書物」と題された基調講演の冒頭、今福氏から参加者全員に素敵なお土産を二ついただいた。ひとつは、モネタリアという学名をもつタカラガイの貝殻。もうひとつは、木麻黄の種である（いずれも、氏が主宰する「奄美自由大学」の舞台である奄美大島の自然物とのこと)。ご講演では､演題にも含まれているキーワード、Nature’s Writing〈自然が書き記したこと〉を軸に、柳田國男、ポール・フリードリッヒ、ゲイリー・スナイダーらを参照しながら、『ウォールデン』のなかのbulkという言葉に注目しつつ、ソローのテクストの読み直しが行われた。Nature Writingのカノンと位置づけられる『ウォールデン』において、ソローは、Nature’s Writingを書きとっていったのだ、という読みを展開していく氏の論旨は明快であり、非常に刺激的な時間を過ごすことが出来た。第一日目終了後に行われた懇親会は、生田キャンパスからのもう一つの最寄り駅、向ケ丘遊園駅近くのイタリアンレストランで行われ、時折激しい雷雨に見舞われながらも、沢山の参加者で大いに盛り上がりを見せた。

大会第二日目は、役員会および総会の後、「研究発表２」と「映画上映と監督講演」が行われた。「研究発表２」は、関西学院大学の塚田幸光先生による「核とマネキン――ニュークリア・シネマの政治学」と、大東文化大学の中垣恒太郎先生による「災害SF文学の想像力――都市・自然・環境・テクノロジーの政治学」という、いずれも「政治学」という文言が表題に含まれている二つのご発表で構成されていた。３月11日の東日本大震災とその後の福島原発の問題に直結する、核と災害をテーマとした本セクションは、非常に緊張感あふれるものだった。塚田先生のご発表では、主に映画メディアにおける「核をめぐる風景」に表象されているものとされていないもの、その両面に目を向けることによって核と映像の問題を考察された。中垣先生は、映画、マンガにも言及しながら、アメリカ、ニューオリンズを襲ったハリケーンカトリーナによって露呈することとなった、行政が抱える問題

点や人種差別の問題に言及され、災害をめぐる言説や災害文学をエコクリティカルに読む意味を再考する上で示唆的な視点を提示されていた。

「映画上映と監督講演」のセクションでは、由井英氏が監督された映画『うつし世の静寂に』(2010年)を視聴した。大会が開催された明治大学生田キャンパスも含まれている「川崎市北部」を舞台にしたこのドキュメンタリー映画は、「念仏講」、「巡り地蔵」、「「谷戸」の風土」、「初山獅子舞」(パンフレットより)を追い、土地と人、自然と人、そしてそこに住む人々同士の〈つながり〉を描いた作品である。上映後の監督講演では、明治大学の菅啓次郎先生を司会に、由井氏とプロデューサーの小倉美恵子氏とのトークセッションおよび質疑応答が行われた。スクリーンに映し出される、土地と、その歴史とともに日々の生活を送る人々の姿とともに、質疑応答のなかで最も印象深かった言葉は、「土地との関係によってアイデンティティが規定され、コミュニティがつくられていく」という言葉であった。土地を奪われるということが、人間同士のつながりも、土地との歴史も、その人のアイデンティティをも失うことになるのだということを、土地とともに生きる人々の姿を見ることで改めて感じることができた。

喜納副代表の「閉会の辞」で全国大会は一端幕を閉じたが、最終日の第三日目には、映画の舞台となった生田緑地を散策するエクスカージョンが行われた。映画のプロデューサーであり、ささらプロダクション代表の小倉氏がコーディネーターを務めてくださり、映画の終盤で描かれていた、約100年ぶりに初山獅子舞が奉納されたとんもり谷戸(正八幡神社跡)を訪ねた。実際に獅子舞が行われた場所には、奉納の際に地面に埋め込まれた縄の跡(土俵のように円で囲ったもの)がまだ残っており、本当にその場所に立っているのだ、と感慨もひとしおだった。その後、小倉氏に土地のご案内をしていただきながら生田緑地へと足を運び、岡本太郎記念館の前で記念撮影をし、散会。充実した三日間が終わってしまったことを惜しみつつ、来年の全国大会でまた多くの皆さんとお目にかかれることを楽しみにまた一年がんばろう、と思った最終日だった。

普段、メーリングリストや書籍、雑誌論文などを通してしかコンタクトできない方々と、実際にお目にかかることができること。そして、新たな出会いのチャンスに満ちていること。これこそが、学会の醍醐味であると、改めて感じることができた2011年の全国大会でした。最後になりましたが、運営してくださった、明治大学の菅啓次郎先生、波戸岡景太先生、そして、明治大学の院生の皆さんに、感謝申し上げたいと思います。本当に充実した三日間を気持ちよく過ごさせていただき、ありがとうございました。

(立教大学院生・山田悠介)

◉大会報告

第９回ASLE-US

茅　野　佳　子（明星大学）

６月21日から６日間、インディアナ大学で“Species, Space, and the Imagination of the Globe”をテーマとする第９回ASLE-US大会が開催され、21日から24日まで参加した。３月に起きた大地震、津波、原発事故の影響で、日本中がまだ混乱しているときだった。体調を崩していたこともあり、参加を迷ったが、こんなときだからこそ行ってこようと決めた。アメリカでは、春から初夏にかけて、広域に渡る竜巻やミシシッピ河の大規模な氾濫、山火事等、自然災害が続出しており、行きの乗り継ぎ便が雷雨のためキャンセルになるというハプニングもあった。報告書を書くつもりできちんとした記録をとっていなかったため、不十分な大会報告となることをあらかじめお詫びしておきたい。

これまでのASLE-US大会では、期間中、参加者にペットボトルの水を配布していたが、今回は受付のところに飲料水のタンクが置かれ、参加者は繰り返し使えるアルミボトルを渡された。参加者の数は発表者の数とともに大幅に増え、どのセッションも18から20の発表グループが同時進行、どれに参加するかを決めるだけでも大変だった。７～８人の発表者が数分ずつ発表し、発表後の話し合いに時間をかけるpaper jam session が増えたのも、今回の特徴ではないかと思う。

初日の午後には７つのテーマで３時間に及ぶPreconference Workshopが開かれ、事前に申込をして準備をしていることが参加の条件だった。後で関心のあるテーマのワークショップが２つあったことに気づいた。Black on Earth: African-American Ecoliterary Traditions (2010) の著者Kimberly Brownによる“Human Natures: Approaches to Teaching Eco-literature & Human Groups”と、Joni Adamsonによる“Global Indigeneity, Environmental Justice, and Ecocriticism”である。ASLE-USのウェブサイトで、それぞれのワークショップの概要と参加希望者への事前の課題やアドバイスを読むことができる。あとで知ったのだが、ワークショップは頼めば聴講させてもらえるようである。

Lawrence Buellの功績を讃える夕方のオープニングレセプションまで時間があったので、スペシャル・コレクションのあるLily Libraryで、事前にインターネットで調べておいたErnest Setonの書簡を見ることにした。探していた情報は得られなかったが、大恐慌から第二次世界大戦に至る時期に、Setonやその妻が出版社とやりとりした書簡やSetonの遺書を読むことができ、大変興味深かった。静かな図書館の一室で過ごした数時間は、雑念・雑事を離れられる至福のひとときだった。

以下、参加した基調講演と発表セッションの中から、いくつか報告したいと思う。

２日目の朝の基調講演は、New York UniversityのUna Chaudhuriによる“Theatre of Species”と、University of TasmaniaのHelen Tiffinによる“How to Explain History to a Dead Goat: Animal Rights, Conservation, and Human Overpopulation”だった。前者は主に映像によるプレゼンテーションで、「動物の擬人化」とは逆に「人間の動物化」とも言える奇抜なパフォーマンスやアニメの映像で聴衆を沸かせた。多くの生き物と共有している地球を我が物顔に支配する人間に対し、ひとひねりした警告を発していた。イラクへの爆撃後、動物園から町にさまよい出たライオンがアメリカ軍に撃ち殺されたという話が印象に残っている。Tiffinは、ポストコロニアリズムとエコクリティシズムをつなぐ研究を続けている人で、最近は動物研究に力を入れているという。「人間こそが地球におけるがん細胞である」「人間の生き方こそが問題である」という言葉に力がこもっていた。

２日目の午後の“Anthologizing Ecocriticism”と題するPaper Jam Sessionには多くの聴衆が集まった。発表者はJoni Adamson、Cheryll Glotfeltyを含む７名。学術誌 American Literature がスペシャル号でエコクリティシズムを特集していることや、オックスフォード出版局から The Oxford Handbook of Ecocriticism が2012年に刊行予定であること、オンライ

ンと書籍の両方で講読できる学術誌 Qui Parle: Critical Humanities and Social Sciencesが“At the Intersections of Ecocriticism”という特集を組んでいることなどが報告され、相次いで刊行されるエコクリティシズム関連の文献のアンソロジーを編纂することの重要性が語られた。これまでにも言われてきたことだが、異文化間、異分野間のコミュニケーションを促進すること、ローカルとグルーバルをつなぐこと、アングロアメリカ中心のエコクリティシズムから多様な文化や地域を含むエコクリティシズムへ、といった提言がなされた。Glotfeltyが1992年から2012年刊行予定のものまでを含むエコクリティシズム関連文献リスト（５枚）を配布したのだが､不足して受け取れなかったため、帰国後電子ファイルを送ってもらった。（欲しい方は茅野までご一報ください。kayano@ed.meisei-u.ac.jp）

３日目の朝の“Ecopedagogy Jam”と題する Paper Jam Sessionに、発表者の６人のうちの１人として参加した。どれも教育実践の報告であり、教育現場におけるさまざまな工夫や取り組みを知ることができた。子どもから大人まで楽しめるハイクを作るゲームで自然に目を向ける活動や、ライティングを通して異なる意見の合意点を探ることで環境倫理を学ばせる方法、身近な環境を意識することのできた経験について学生の書いたエッセイを本にし、それをテキストにする試み（実際に学生の書いたエッセイの一つを読んでくれたが、色とりどりの野菜を育てている家庭菜園で働いた経験について書かれていた）、ロマン派文学を国境や著者の枠組みを超えた世界文学として読むことで、新たな可能性を見いだす視点などが語られた。私は、昨年度から始めた教員養成課程におけるアイヌ民族理解のための体験型授業の取り組みと、その意義について報告した。

４日目の朝の“No Endangered Species: Local and Global Struggle for Ecojustice――Why Arts and Humanities are Crucial”という Paper Jam Sessionには、小さい教室にあふれるほどの聴衆が集まった。Kimberly Ruffinが、黒人ハイカーが山を歩いていて見せ物になってしまう“Black Hiker”という短いビデオクリップ（“Funny or Die”のウェブサイトで見ることができる）を見せて、“ecological citizenship”の必要性を訴えたのを始め、アジア系やメキシコ系女性文学をエコクリティシズムの視点で読む試み、ニューヨークのブロンクスで自然と文化の多様性を意識させる授業の実践等についての発表があった。最後にElizabeth Ammonsが「人間は本質的にストーリーテラーである」、「我々が行動を起こすのは愛情や感情によることが多い」、「人間の脳はデータからよりも物語から多くを学ぶものである」と主張し､「語り」や「文学」の重要性を訴えた。

同日、“Unnatural Histories: Toxic Spaces, Bodies, and the Discourse of Survival”と題する Scholarly Paper Sessionがあり、アメリカで核汚染の犠牲となった異なる世代の綴るメモワール、日本に強制移住させられ被爆した朝鮮人労働者の証言に基づいて書かれた原爆小説、そして沈黙を破り語り始めた癌生存者のナラティブ、及び癌を語るディスコースについての研究発表があり、これまで見えなかった実態や問題が浮き彫りにされた。タイトルと発表者は次の通りである。“Memoir as a Style of Nuclear Toxic Literature”（伊藤詔子）、“(Post) Colonial/Imperial Bodies and Atomic Bomb Narratives”（松永京子）、“From Silence to the Art of Telling: Breast Cancer after Rachel Carson”（浅井千晶）、そして“Surviving the Discourse of Cancer”(Maichael Gorman)。発表を聞きながら、日本の原発事故が今まさに多くの新たな「文学」を生み出していることを思い、放射能とともに生きなければならないこの時代に､「文学」の果たす役割について考えさせられた。

４日目の午後のフィールドトリップの時間帯には、原発事故の前から岩政さんが企画していたという「祝の島」の英語字幕版が上映された。どんどん若い人が減って行く小さな島で、30年もの間、自然と暮らしを守るために原発反対を訴えてきた祝島のお年寄りたち。その生きる姿をそのまま伝える貴重な記録映画だった。この場を借りて岩政さんに感謝を伝えたいと思う。上映終了後、会場に残った参加者の間で原発について話す時間を少しもつことができた。この瞬間も、世界中の原発では大量の核廃棄物を生み出し続けている。今後ASLEの中からも脱原発に向けての活発な議論や動きがあることを期待している。

最終日のセッションと大会終了後のフィールドトリップには参加できず、一足先に帰国しなければならなかった。後で確認したところ、次の大会開催場所は北テキサス大学(University of North Texas)に決まったそうだ。

◉大会報告

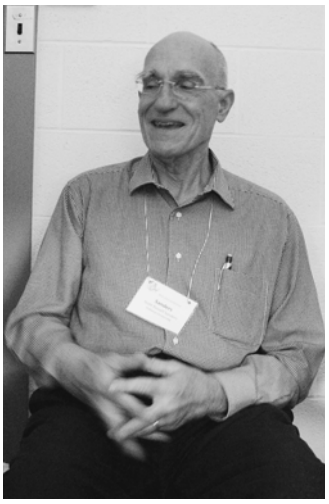
第9回ASLE-US Scott Russell Sandersと音楽劇Wilderness Plots

浅　井　千　晶（千里金蘭大学）

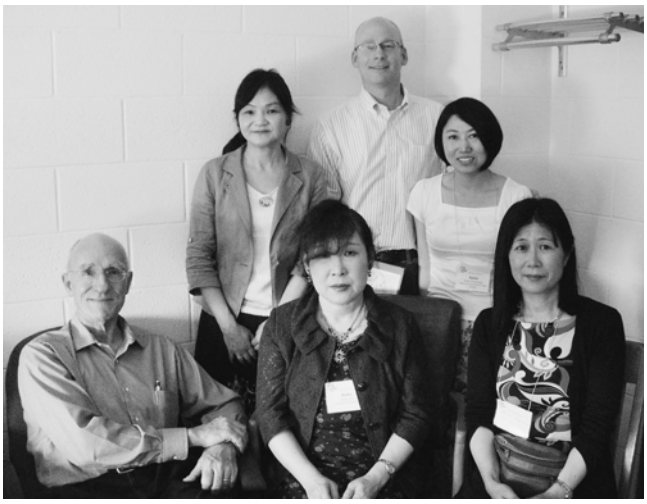
2011年６月21日～26日に開催されたASLE 2011大会に参加した。会場のインディアナ大学ブルーミントン校は広々としたキャンパスで木立の中に建物があり、目的地がわからず待ち合わせがうまくいかなかったりもしたが、緑豊かな会場だった。

今大会のテーマは“Species, Space, and the Imagination of the Global”で、全体講演以外のセッションは、各人が自分の興味に沿って参加しやすいように、テーマによって15の流れ（Stream）に分けられていた。Michael Gorman氏(広島市立大学)を司会に、伊藤詔子氏（松山大学)、松永京子氏（神戸市立外国語大学)、浅井の４人で組んだパネル“Unnatural Histories: Toxic Spaces, Bodies, and the Discourse of Survival”は被爆・被曝の問題や癌の表象を扱うもので、“Toxicity, Disaster, and Resistance”(Stream 4)に位置づけられていた。同じStream 4では、Margaret AtwoodやCormac McCarthyの作品を扱うパネルや映画と災害を扱うパネル、毒性と環境正義の問題を問うパネルなどがあった。

大会４日目、６月24日の夜に、Indiana Memorial Union内の立派なAlumni HallでScott Russell Sandersの作品を基にした公演Wilderness Plots: An Evening of Songs and Storiesがあった。Wilderness Plots（1983）は1780年頃から南北戦争前の時期のオハイオ谷への定住の軌跡を追った50の短い話からなり、さまざまな登場人物が西部開拓時代の生活の悲喜こもごもを織り成している。2006年にこの作品に出会ったTim Grimmが民話調の物語に「歌」を感じ、仲間の作詞家・音楽家であるKrista Detor, Carrie Newcomer, Tom Roznowski, Michael Whiteとともに2007年に音楽アルバムを発表。その後、原作者のScott Russell Sandersを語り手にアメリカ各地で公演が行われており、当日はテレビ局が撮影に入っていた。楽器を手に聴衆に語られる歌は力強く、想像をはるかに超えたすばらしいパフォーマンスだった。



翌６月25日、インディアナ大学にいる上地直美氏のご尽力で、Sanders先生を囲んだ懇談会が実現した。Scott Russell Sandersは2009年にインディアナ大学を退職後も研究室を学内に持っており、窓から緑が見えるここちよい部屋で歓談させて頂いた。この集いを企画した上地氏が骨折の手術後で来られず、当日参加したのは、インディアナ大学で在外研究中の杉山直子氏（日本女子大学)、芭蕉やGary Snyder、日本に興味があるというDavid Barnhill氏（ウィスコンシン大学Oshkosh校)、前述の“Unnatural Histories”のパネルに参加した４人で、Sanders先生の研究室にちょうど収まる人数だった。インフォーマルな集いなので、話題は昨日の公演のことはもちろん、Sanders先生が自らの著作を授業でどう扱ってきたかや各人の研究や日本のASLEのことなど、思い思いに話が弾んでいた。近作A Conservationist Manifesto（2009)もある中、公演に参加していた歌手Krista Detorの非常に豊かな髪に触れ、髪の薄い人は彼女の髪のconservationに協力しているんだとコメントするなど、Sanders先生はユーモアのある話し手だった。私は現任校の所属が児童学科なので、Wilderness Plots の中の“Aurora Means Dawn”や“The Multiplication of Wool”（絵本の題はWarm as Wool）が独立した絵本になり、学校の歴史の授業に使われたり、子どもたちに毛織物ができる過程を伝える教材になったりしていると聞いたこと、この本が民話のように人々に広く受容されていることが特に興味深かった。日本からの参加者はそれぞれ持参したSandersの著書に記念のサインもしてもらい、約１時間後に彼の研究室を後にした。



海を渡ったアイヌのアーティスト

～米国オレゴン州で木とともに生きる二谷政道さん～

茅　野　佳　子（明星大学）

オレゴン州ポートランド市。市の中心の小高い丘にある世界森林センターのミュージアムに、両手で抱えられるほどの大きさの木彫りのクマが大切に飾られている。サケをくわえた見事なクマだ。サケの表皮にはウロコ彫り、クマの毛皮にはヤナギ彫りが細かく施され、今にも動き出しそうな躍動感にあふれている。このクマを彫り、センターに寄贈したのは、北海道二風谷出身の二谷政道さんだ。オレゴンに移り住んで30年ほどになる。

1988年、病気にかかった大きなクログルミ（black walnut）の木を市が切り倒したときに、その木を森林センターに寄贈し、森林センターがアメリカ西部木彫家協会に寄贈したのだそうだ。協会に所属していた二谷さんは、そのとても値打ちのある大きな木の一部を受け取ってうれしかったという。「こんな木はなかなか見つからない。とても硬くてしっかりしている。」何か特別なものを作ろうと考え、サケを口にくわえたクマを彫ることにした。そしてそのクマを森林センターに寄贈したのだった。このときのことを地方紙「オレゴニアン」の記事が詳しく伝え、二谷さんの半生を紹介している。

『銀のしずく～アイヌ民族は、いま』（北海道新聞社、1991年）という本の中に、帰国中の二谷さんにインタビューした記者が書いた「『木』に呼ばれて」という文章がある。そこに二谷さんが子どもの頃に木彫りを学んだ様子や、オレゴンに住みたいと思ったきっかけが書かれている。幼い頃から、まわりのおとなたちが細かなアイヌ文様を彫り込んだお盆や器を作るのを見て育った二谷さんは、中学生のときに地元の木彫家貝澤守幸さんのもとで、伝統的な器を作るのに必要な木彫りの技術を身につけたという。その後、動物の木彫りをしたいと思い、白老にクマの木彫りを習いに行ったそうだ。

16歳で貨物船の乗組員となって、４年間、アジアやオーストラリアや北米の港に帰港しながら仕事をしていた。ある日、船はオレゴン州とワシントン州の州境を流れるコロンビア川をのぼり、ポートランドの港に着いた。巨大な丸太を船に積み込み、上陸して大きなクルミの木や針葉樹の生い茂る森を見て、無性に木を彫りたくなったのだそうだ。オレゴンに住みたいと思い、働いてお金を貯め、1983年にポートランドに移り住んだのである。

私もかつてポートランドに６年ほど住んでいたことがあり、森と川に囲まれた美しいポートランドの暮らしを心から楽しんだ経験がある。久しぶりでポートランドを訪れた今年の２月に、二谷さんと知り合う機会があった。二谷さんの自宅の仕事場を訪ね、これまでに作ったものや、今手がけているものを見せてもらいながら話を聞いた。小さい木片も捨てずにとっておき、手に取って眺めているうちに、作りたいもののアイディアが湧くのだという。いろいろなサイズの木の器の中には、木にあいていた穴を活かしてつくった花瓶もあった。蟻が巣食ったあとのある木をそのまま使って作った電気スタンドの台には、コードも今のビニール製のものではなく昔の布のものを探して使ったという。

クログルミは硬くて美しい木で、黒い筋の模様が入っているのだが、木の断面を見るとそれがストレートではなく歪んでいる場合がある。これは木が動いている証拠で、風などによるストレスによって模様が均等でなくなるのだそうだ。木片を見せながら木や木彫に使う道具の説明をしてくれた。裏庭には、頼まれて製作中の動物の木彫りが置いてあった。木彫だけで生活していくのは大変なので、ポートランドに住むようになって間もない頃に始めた大工仕事を、今も続けているという。

二谷さんが子どもの頃のことを少し話してくれた。二風谷の小学校はほとんどがアイヌの子どもで、クラスには和人が一人いただけだった。中学校に入ってから差別が始まったけれど、黙って我慢していた。子どもの頃、家のまわりでは、アイヌは皆貧しく、豊かなのは和人だった。船で働いていたとき、まだクマ狩りをしているのか、などと聞いてくる船員もいたが、気にするなと言ってくれる仲間もいた。日本を発つとき、今は亡きお母さんがもたせてくれた『アイヌ芸術』という写真入りの本を大切にしている。

やはり日本を発つときにお姉さんが作ってくれたアイヌ刺繍の着物は、なかなか着る機会がなかったが、2009年にポートランドのジャパニーズ・ガーデンで木彫りのデモンストレーションをするときに、初めて袖を通した。そのときの写真が大きく地元の新聞の一面を飾っている記事を見せてくれた。もう一面には、

彫刻刀を手にする二谷さんの手元がクローズアップされ、となりには楓の木で作った器の底に彫った見事な波模様の写真があった。このとき、ジャパニーズ・ガーデンにあるパビリオンでは、カナダに隣接する地域の先住民族（トリンギットやツィムシアンと呼ばれる民族）とアイヌ民族の織物や着物を比較する工芸展「重なり合う世界」が開かれており、その一環として木彫りの実演が企画されたのである。

９月に再びポートランドを訪れたときには、毎年恒例になっているというアート・ショーがジャパニーズ・ガーデンで開かれており、パビリオンの一隅に二谷さんのコーナーがあった。素材の美しさを活かし、丁寧に磨かれた木の器がたくさん飾られており、前日に舟の形をしたクログルミの器を購入した人が、もう一度作品を見たくて訪れていた。地元の木で作られたシンプルで暖かみのある器は、オレゴニアンの間で確実にファンの輪を広げていくことだろう。

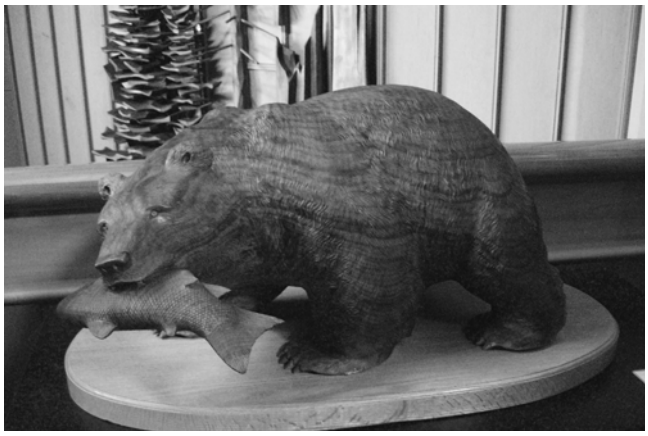
翌日、森林センターで、二谷さんが寄贈した木彫りのクマを見ることができた。実物は実に迫力があり、しばらく見とれていると、このクマを制作したときのことを話してくれた。木の中心部を使うと歪むので、縦半分に割って、その半分を使って熊を彫ることにしたのだそうだ。彫り終えるとワックスを塗り、下の方から垂直に穴を５つ開けて空気を抜き、孫の代にもこのクマを見てもらえるように、ひび割れることのないようしっかり乾燥させて仕上げたのだという。

その確かな技術は口伝えで広まり、フッド山の中腹にある古いロッジの木製の家具や工芸品の修復、複製作りも手がけるようになった。ティンバーライン・ロッジ（Timberline Lodge）と呼ばれるこの大きなロッジは、大恐慌下の1937年に、ローズヴェルト大統領のニューディール政策の一つWPA（Works Progress Administration）によって建設されたもので、国定歴史建造物になっている。オレゴンの豊富な木を使い、細部までこだわって作られたロッジには、全て木製の手作りの家具が置かれ、建物の内外のいろいろな場所に動物の木彫が施されている。二谷さんは、古くなって痛んでしまった家具を修理し、ひびが入り壊れそうになっている木彫りの動物のレプリカを作る仕事を担当している。2月に自宅の裏庭で作業中だった木彫りの動物も、ロッジの階段の柱の上に彫られていたものをそっくりに作り直していたのだった。

どんなに大変そうな仕事でも、「できる？」とたずねられれば「うん、できるよ。」と答え、一つ一つやり遂げてきた二谷さんは、ロッジのディレクターの絶大なる信頼を得て、頼りにされているのがよくわかった。子どもの頃に身につけた確かな技術を磨きながら、第二の故郷となったオレゴンで、大好きな木に囲まれて暮らす二谷さんは、最近、“Crafts in America”というテレビ番組の取材を受けた。自分で工夫して作った木彫りの道具を説明し、実際に木を彫る様子が撮影されており、その映像がウェブで公開されている。

http://www.craftinamerica.org/wood/story_72.php

追記：ポートランドは北海道とほぼ同じ緯度にあり、気候もよく似ているが、冬の寒さはそれほど厳しくない。森が多く、北海道の森とほとんど同じ木が茂っているそうだ。野生のベリー類やキノコがたくさん採れ、巨大なマツタケも生える。また、コロンビア川には秋になるとたくさんのサケがのぼってくる。二風谷では、昔は溢れるほどサケが上って来た沙流川にダムが作られてしまい、サケが上れなくなってしまった。コロンビア川のダムは、サケが上るのを妨げないように作られ、ふ化したサケを放流するとともに野生のサケの保護をしているという。9月に訪れたときには、コロンビア川の支流で、地元の先住民が自由にサケを捕れる時期を迎えて漁の準備をしていた。北海道では、伝統文化保存のためといった理由で申請をして許可を得なければ、アイヌにサケ漁は認められていない。申請して認められたとしても、限られた場所で限られた数しか獲ることはできないのが現状である。



旅人と居住者の間：外国暮らしと中島みゆき

相　原　優　子（武蔵野美術大学）

ある夕暮れ時、知人が、購入したばかりの中島みゆきのCD『大吟醸』から、一曲ずつ、さわりの部分だけを聴かせてくれながら、ポツリと「外国で暮らすと中島みゆきにハマるんだよねぇ」と感慨深げに呟いたことを思い出す。その一言に、私は思わずニヤリとしてしまった。私の場合もまさにその通りだったからである。その人はイギリス留学時代、私はマレーシアで暮らしていた時に、彼女にハマってしまったのであった。マレーシアのクアラルンプールの街を歩きながら、日本の音楽が恋しくて恋しくて、繁華街のレコードショップを覗いては、日本の音楽（今で言うところのJ-Pop）のアルバムを漁っていた。日本に居たら、おそらく手に取ることもなかったであろうものも含めて、ありとあらゆる日本人アーティストのカセットやレコードを買い込んでは聴いていたが、その中でも、中島みゆきの歌だけは、日本に帰国してからも折に触れてずっと聴き続けてきた。中国系マレーシア人が多いためだろうか、クアラルンプールで買った中島みゆきのカセットのジャケットには、彼女の名前が「中島美雪」と漢字表記されていたのを憶えている。中島みゆきの音楽について思うとき、いつもあの知人の言葉を思い出す。その何気ない一言が、中島みゆきの作品の本質に触れているように思われるからである。音楽通でもない私が、無謀にも、中島みゆきの歌を環境文学の視点から眺めてみようと思い立ったのも、おそらくその一言がずっと記憶に留まっていたからだろうと思う。

中島みゆきの歌が、少なくとも二人の海外生活者の心を掴んだのは、彼女の歌の多くがborder（境界線）を巡るものであるからなのかもしれない。惨めな失恋、片想いを歌った歌にさえも、borderという概念に向けられた彼女の芸術的関心が垣間見えるように思われるのである。

例えば、自分の恋の終わりを、たまたま周りから知らしめられる、というような内容の歌がいくつかある。海外生活者の胸によりリアリティをもって響くのは、ペルソナの失恋の痛手以上に、周りの友人たちがそのことを知っていたのに自分だけ知らなかったという、

ペルソナの感じた疎外感の方であろう。自分のいる場所、所属しているコミュニティに対する疎外感や違和感は、中島みゆきの作品殆どに共通して歌われているのである。

中島みゆきの歌には、旅人や漂泊者が多く登場する。彼らが故郷から遠く離れているという点も、海外生活者には親近感をもって受け入れられるのかもしれない。彼女の歌の中では、「ふるさと」は、常に遙か遠い場所として提示される。彼女の歌には、旅人や漂泊者など、故郷を遠く離れている者達に共通した寄る辺ない寂しさへの共感がある。一方、彼女の描く旅人たちの中に無事故郷に帰り着いた者が殆どいない、という点に注目してみたい。中島みゆきの歌に登場するのは、道半ばで倒れてしまう旅人や、故郷そのものに背を向けて、放浪を続ける漂泊者たちである。まるで「ふるさと」という見えない境界線で括られた場所の概念に懐疑的でさえあるかのようである。彼女の名曲として名高い「ファイト！」という歌の中では、「ふるさと」のしがらみから逃れられず、「ふるさと」に留め置かれたまま、自由に人生を生きられなかった人の嘆きが歌われている。彼女はその歌の中で、最も親しみがあって最も居心地よい場所である筈の「ふるさと」の中にも排他性や暴力性という負の要素が潜んでいるということを暗示しつつ、一般的に、無批判のまま使用され

る「ふるさと」という概念を問い直すよう促しているようにも思われる。

彼女の書いた一連の歌詞は、よくよく眺めてみると、驚くほど豊かな自然のイメージに溢れている。歌の中には、いくつもの自然モチーフが登場する。これらの中で印象的なものとしては、空、海、風、つばめ、かもめ、魚、たんぽぽ、ひまわり等が挙げられるだろう。興味深いことに、これらの自然モチーフは、人間の作り出した境界線に阻まれることなく自由に拡がり、飛翔し、越境していく力を有しているものばかりである。彼女の歌う魚たちは、海の中で、易々と人間たちの作り出した境界線を越えていく（「ファイト！」）。鳥たちは、人間が持ち得ない空からの視点で人間の社会を見下ろしている（「地上の星」）。土地に根付いていたたんぽぽも、時期が来れば、綿帽子となって千々に飛んで行き、また新たな土地で根を張って、どこかへ飛んでいく（「彼女の生き方」）。長い柵を挟んで銃声が鳴り響く中、柵の向こう側に咲く一輪のひまわりは、柵によって隔てられてはいても、その香りは、人為的な境界線を越えて拡がっていく。太陽の光は、柵のこちら側にも向こう側にも分け隔て無く降り注いでいるのである（「ひまわり” Sunward”」）。

人間は今までも境界線を作ってきたし、これからも境界線を作り続けるだろう。皮肉にもそのおかげで、この世には、均一的な単一文化ではなく、それぞれ地域固有の文化が根付き育まれてきた、とも言える。この世から境界線が無くなることはないだろうという現実があるからこそ、彼女は、歌の中で、自然のモチーフに、境界線とは分断し封じ込めるものではなく越えていくものである、という祈りを込めた願望を託しているのではないか。人種的、文化的差異に満ちたこの世の中で、自然への愛情と関心が、人間を結ぶ共通の言語、足場になることを、彼女の歌は示唆している。

海外生活では、私たちは俄に旅人と居住者両方の視点を有することになる。自分の慣れ親しんだ居心地の良い領域から出て、未知の世界に、先ずは、旅人、よそ者として入り込み、次第に、居住者として生活し始める。その中で、文化や生活習慣の差異に戸惑い、疎外感や孤独を感じつつも、一方で、文化、言語が違っても人間は人間なのだ、ということを学習していく。旅人的感覚と居住者的感覚との間を往還する中で、私たちの「border 感」は常に挑発され、意識化される。二人の海外生活者が、border を歌い続ける中島みゆきの歌にハマったのは、ごく自然なことなのかもしれない。「自然・環境」を共通キーワードとしての「旅人」と「居住者」という二つの拮抗する視点の間の緊張とバランスというテーマは、今日の環境文学的関心とも大いに合致しているのではないだろうか。

現代ネイチャーライターの横顔⑯

「ウィリアム・フォークナー」

大野　瀬津子（●九州工業大学）

「小さな郵便切手ほどの生まれ故郷の土地」(Meriwether 255) をモデルにヨクナパトーファ・サガを創作したウィリアム・フォークナーは、度々「自分の環境と対峙する人間」への関心を語っている (Gwynn 19)。小説家自身の言葉に引きつけられるように、フォークナー研究者の多くもまた、作中人物と南部の「社会環境」との関わりに注目してきた。結果、フォークナーは、「南部作家」として広く知られるようになったといえる。だがその傍らで、フォークナー文学の「自然環境」に目を留める批評の系譜も、脈々と息づいてきた。ここでは、少年アイクの大熊狩りを描いた中編、「熊」(1942) の批評史を概括してみたい。

「熊」を扱った初期の代表的論文集、『熊、人間、そして神』(1964) の執筆者の一人、ジョン・ライデンバーグによれば、「熊」は、ウィルダネスとの争いを通じ人間が「純粋さ」を回復する物語であり、本質的に「自然神話」である (160)。また、同書中、R.W.B.ルイスは、アイクが「ウィルダネスの家父長」たる大熊との決闘によって「モラルの解放」を達成する教養小説として同作品を読む (190)。このように初期の批評家たちは、総じて作中の自然を普遍化し、作品執筆当時の作家を取り巻いていた自然環境には注意を払わない。

フォークナー作品中の自然を歴史化する嚆矢となったのが、『フォークナーと自然界』(1996) である。同書中、ローレンス・ビュエルは、「環境保護論者の思想」が台頭し始めた1930年代の深南部にあり、ミシシッピ州がトップの材木産出量を誇る一方で、森林再生では最下位に沈む史実を明るみに出す (11)。同時にビュエルは、このような状況下でフォークナーが、「ストーン大佐の保有地」の獲物を守るべく、「オカトバ狩猟・

釣りクラブ」を組織したという伝記的事実にも触れる(10-11)。ビュエルが「熊」に看取するのは、作家自身が身を置いていた1930年代的な南部の「環境史」や「環境保護思想」の反映に他ならない(11)。ビュエルら環境批評家たちの手により、「熊」中の自然は、歴史的文脈へと開かれることになった。

こうしたアプローチは、最近の研究にも継承されている。一例として、フォークナー作品内の「フィクショナルな地理学」と南部の「ローカルな地理学」との関係を詳細に検討した、チャールズ・エイケンの『ウィリアム・フォークナーと南部の風景』(2009)を挙げることができるだろう(5)。エイケンは、「熊」で、アイクが「ロード・トゥ・ゴッド」と呼ばれるキツツキの音を聴く場面に着目し、この鳥が1944年に絶滅したとされている事実を指摘する。彼は「熊」に、執筆当時の南部の自然環境が描き込まれていることを再確認するのだ(164)。これらビュエルやエイケンの解釈に照らせば、同時代の自然環境や生き物、環境保護思想に敏感に反応していた作家の姿が透けて見えてくる。環境批評は、「南部作家」の影に隠されてきた「ネイチャー・ライター」としてのフォークナーの横顔に光を当てたといえよう。

しかしこの稿を閉じる前に、「フォークナーはグリーンなのか？」というフランソワ・ピタヴィーの挑戦的な論考に触れないわけにはいかない。彼は、フォークナーが作品で「本当の人間と自然の関係」を描いているのか、あえて疑問に付す(82)。彼によると、答えは否だ。理由は、「熊」を含む『行け、モーゼ』(1942)中のウィルダネスは、「空間自体」ではなく、「永遠」に生きたいという人間の「願望」と、それが満たされないことによる「不満」の「反映」であるからだ、という(90, 94)。ピタヴィーの指摘は、「ネイチャー・ライター」という肩書きからはみ出しかねないフォークナーの複雑さを暗示している。いみじくもエドワール・グリッサンは、「この場所」を再創造するフォークナーの筆致が、「運動、躊躇、変遷、不確かな複数のアイデンティティ、複数の真実」等の「何か」を揺さぶるがゆえに、彼の世界を「フロンティア」とみなす(227-28)。事実、フォークナーのテクストは、その作者の全身を手持ちのファインダーの中に収めようとする我々読者の眼前を軽々とすり抜けて、まだ見ぬ地平へと我々を誘い続けるのである。

引用文献

Aiken, Charles S. *William Faulkner and the Southern Landscape.* Athens: U of Georgia P, 2009.

Buell, Lawrence. "Faulkner and the Claims of the Natural World." *Faulkner and the Natural World: Faulkner and Yoknapatawpha, 1996.* Ed. Donald M. Kartiganer and Ann J. Abadie. Jackson: Mississippi, 1999. 1-18.

Glissant, Edouard. *Faulkner, Mississippi.* Trans. Barbara Lewis and Thomas C. Spear. Chicago: U of Chicago P, 1999.

Gwynn, Frederick L. and Joseph L. Blotner. *Faulkner in the University.* Charlottesville: UP of Virginia, 1959.

Lewis, R. W. B. "The Hero in the New World: William Faulkner's 'The Bear.'" Utley, Bloom, and Kinney 188-201.

Lydenberg, John. "Nature Myth in Faulkner's 'The Bear.'" Utley, Bloom, and Kinney 160-67.

Meriwether, James B., and Michael Millgate, eds. *Lion in the Garden: Interview with William Faulkner 1926-1962.* New York: Random, 1968.

Pitavy, Francois. "Is Faulkner Green? The Wilderness as Aporia." *Faulkner and the Ecology of the South: Faulkner and Yoknapatawpha, 2003.* Ed. Joseph R. Urgo and Ann J. Abadie. Jackson: UP of Mississippi, 2005. 81-97.

Utley, Francis Lee, Lynn Z. Bloom, and Arthur F. Kinney, eds. *Bear, Man, and God: Eight Approaches to William Faulkner's "The Bear."* New York: Random, 1964.

◉ASLE-J-Grad［院生組織より］

磯江毅（Gustavo Isoe）と写実画

小　椋　道　晃（立教大学・院）

９月の初旬、東京の練馬区立美術館で開催されていた磯江毅の絵画展に行った。2007年に53歳の若さで急逝した画家の初期作品から絶筆までを、約80点で振り返る回顧展である。まずは、100cm×182cmの大きな画のなかに、まるで宙に浮いているかのように横たわる裸身の女性。《深い眠り》と題されたこの絵は、女性の肉の弛みや皺、髪の毛一本一本にいたるまで精緻に描き込まれている。静かな絵である。ほとんど観念的と言ってもいいかもしれない。しかし、そのような見方は違うようにも思える。磯江毅の絵を前にして何かを語ろうとするとき、我々はどこかうしろめたい気分を拭い去ることができない。

2004年の個展に向けて書かれた文章のなかで、磯江が写実画について述べている箇所がある。彼は、写実的方法をもちいて自己表現することの「傲慢さ」を感じとり、「写実は、むしろ、自己を抑え、対象物そのものの再現に徹することのなかに、表現意識を封じ込んでいくこと（＝哲学）ではないか」と考えるが、のちに、その考えをも疑問に思い、「表現するのは自分ではなく、対象物自体である」という認識に至る。そして、「その物が表現している姿から、どれだけ重要なエレメントを読み取り、抽出できるかということ」は、「角膜に受動的に映る映像を根気よく写す行為ではなく、空間と物の存在のなかから摂理を見出す仕事」だと考えるようになった。

ここで磯江が用いている「摂理」という言葉は、ともすれば、自然界の超越的な法則と結びつくような印象を受けるかもしれない。しかし、彼の絵に凄みを感じるのは、それが、対象の質感までも写しとる超絶的な技巧で描かれているからではなく、対象物が現実に存在しているという圧倒的な事実による。そのことは、磯江の描く静物画を見ればよくわかる。モチーフとなるのは、マルメロや葡萄、アケビ、花、野鳥の肉、ワインの瓶、頭蓋骨であり、それらは繰り返し同じ構図で描かれている。「物」を凝視することによって、それを見る自己を根源的に問い直しつつ創造されたこれらの静物画を見ていると、あらかじめ記号化された、既成の見方そのものの虚構性を突きつけられるような気がする。

たとえば、緑青のついた真鍮の盆と、その上に、皮をむしられた鶉が二羽並んで置かれた絵。あるいは、盆や背景を取り去り、白い紙に、ただ、二羽の鶉が並んで存在している絵。《静物（盆の上の鶉）》と、その翌年に描かれた《静物（鶉）》からは、「鶉の肉」の皮下に透けている血管や筋肉、臓物まで見通した上で描かれていることがわかる。磯江は、とある手紙のなかで、「物をよく見るということは、物の成り立ちを見極め、やがてそれを解体、解剖することだと思うようになった」と書いている。ただ「見る」といっても、その行為は、「物」から、言葉によって張りつけられたさまざまな意味を注意深く剥ぎとっていかねばならないものだ。対象を見つめ、その「物」以上の意味を描くことをストイックに禁じ、作家が文字通り命を削って、対象の前に踏みとどまって描くこと。そのようにして「実在」させられた絵を前にして、それを見る者が、安易に意味づけをしたり、ましてや何らかの観念性を付与したりすることは避けねばならない。

このことは、ある種のネイチャーライターが自然を描くときに直面する、表象の問題とも深く関わっているように思える。言語の問題に極めて意識的であったアニー・ディラードが、束の間おとずれる自然との「生の出会い」という瞬間を追い求めたように、おそらく磯江毅もまた眼前に存在する物それ自体を捕えようと格闘している。途方もない時間を費やして描かれた作品は、そこで描かれている対象そのものが内包する時間とともに、たしかにそこに存在しているのである。

《参考文献》

『増補磯江毅－写実考 Gustavo Isoe's Works 1974-2007』東京：美術出版社, 2011.

丸善・ユーリカプレス
共同企画　第１弾！

編集および日本語解説・英語序文：大石和欣（名古屋大学）・出島有紀子（桜美林大学）
ナショナル・トラスト創設関連文献復刻集成　全5巻＋和文解説
Foundations of the National Trust
Lives and Works of Octavia Hill, Robert Hunter and H.D. Rawnsley
Edited by Kazuyoshi Oishi and Yukiko Dejima
本叢書は、社会改革者オクタヴィア・ヒル女史（1838－1912）、弁護士ロバート・ハンター卿（1844－1913）、聖職者ハードウィック・ローンズリィ師（1851－1920）という、トラストの創立者たちが残した代表的な著作や書簡、および各人の生涯を描いた伝記を集成する初の復刻コレクションです。
発売中・セット税込価 134,400 円
EPM, JPN / 日本総代理店：丸善
MARUZEN 丸善株式会社 学術情報ソリューション事業部 商品センター
〒140-0002 東京都品川区東品川 4-13-14 グラスキューブ品川 TEL: 03-6367-6079 FAX: 03-6367-6184

◉報告　ポエトリー・リーディング

「太平洋をつなぐ詩の夕べ　ゲーリー・スナイダー&谷川俊太郎」

高　橋　綾　子（長岡技術科学大学）

10月29日（土）東京新宿の明治安田生命ホールで思潮社の主催により、ゲーリー・スナイダーと谷川俊太郎の詩の朗読会が開催された。スナイダー氏は、2007年8月、金沢市で開催された日韓合同シンポジウム以来の来日となった。日米両国を代表する詩人の朗読会とあって、前売券は完売、会場のおよそ300席は満席、数少ない当日券を求めて並ぶ盛況ぶりであった。本朗読会は、それぞれの詩人の朗読と互いの初期の詩のバイリンガルリーディングとトークいう構成であった。獨協大学の原教授より、詩は声の文化であり、詩の文化の伝道を太平洋を越え半世紀以上に渡たり実践してきた二人の詩人（ココペリ）について説明がなされた。引き続いて、スナイダー氏が「パイユート・クリーク」や「かささぎの歌」等を朗読した。次に谷川氏が詩集『私』より、「自己紹介」や「さようなら」等を朗読した。バイリンガルリーディングの部では、『リプラップと寒山詩』より「リプラップ」、「東寺」、『二十億光年の孤独』より「飛行機雲」や「博物館」を互いに朗読した。スナイダー氏は、「谷川さんの詩は自分よりも純粋だ、しかしこの飛行機を考えるとアメリカ人として罪の意識に苛まれる」と語った。谷川氏は、スナイダー氏が宮沢賢治を初めて英訳した業績について触れ、宮沢賢治とスナイダー氏の共通点、つまり、詩の具体性と自然に根を下ろした詩人であることなどを述べた。スナイダー氏と谷川氏の朗読会は実は今回が二回目で、1971年に谷川氏と片岡ユズル氏がニューヨークで詩の朗読を行った際、スナイダー氏も参加した以来であると説明され、その当時の写真が公開された。1971年に谷川氏がスナイダー氏の自宅であるキットキットディジーを訪れた際の思い出話となり、「なぜそこに暮らしたのか」と谷川氏が問い、スナイダー氏が自分の「再定住」について語る場面もあった。最後にスナイダー氏の未発表の詩集Stories in the Nightから「夜話」をバイリンガルリーディングして終演となった。この収益は二人の詩人の意志により東日本大震災の義援金として寄付される。

（撮影：吉原洋一）

広報からのお知らせ

広報では半年に一度程度、ASLE-J書誌情報の更新版をアップロードしております。今後も定期的に情報の更新をしていきたいと思いますので、会員の皆様のご出版やご活動等の情報を広報委員の大野美砂（misa@kaiyodai.ac.jp）までお送り下さい。

2012年の初夏に次の更新を予定しております。具体的な締め切りなどにつきましては改めてご案内をさせて

水の音の記憶
エコクリティシズムの試み
結城正美　文学表現は、はたして《環境》と共生しうるのか。田口ランディ、石牟礼道子、T・T・ウィリアムスらの再読を通して《人－自然》の新たな結びつきを検証する。エコクリティシズムの今後の方向を指し示す鮮烈な批評の誕生。　三〇〇〇円

〈故郷〉のトポロジー
場所と居場所の環境文学論
喜納育江　言葉のない場所に言葉を、生命のない場所に生命を感じとる。アメリカ先住民やチカーノ、そして沖縄の民らの表現を媒介に、重層化する彼らのアイデンティティを問う清冽な環境文学論。《エコクリティシズム・コレクション》　二五〇〇円

ピンチョンの動物園
波戸岡景太　壮麗無比なピンチョン文学の奇想天外なサブキャラクター＝動物たちに着目し、処女長篇『V.』から『重力の虹』、そして最新作『インヒアレント・ヴァイス』にいたる全作品を徹底的に読み解く。《エコクリティシズム・コレクション》　二八〇〇円

コンテンツ批評に未来はあるか
波戸岡景太　データベース化が進行し、人間と社会とがますます乖離してゆく現在、《コンテンツ》はどのように語りうるのか？　村上春樹や『シュタインズ・ゲート』、エミネム、『もののけ姫』にいたる多彩な表現を通して、この《21世紀》を新たに読み直す。　二五〇〇円

日常の相貌
イギリス小説を読む
中川僚子　『わたしを離さないで』『闇の奥』『フランケンシュタイン』『ダロウェイ夫人』『恋する女たち』等の英国小説にひそむ日常と非日常の境界における生の陰影を、怪物の言葉、牧草地の廃墟、ドレスの綻び、漂着するゴミなどをとおして読みとく。　三八〇〇円

水声社
東京都文京区小石川2-10-1-202　〒112-0002
tel. 03-3818-6040　fax. 03-3818-2437
URL: http://www.suiseisha.net
目録呈（〒80円要）◎価格は税別

いただきますが、情報のご連絡はいつでもお待ちしております。既にこれまでに情報をお寄せいただいている方々は、新しい情報のみをお知らせください。これまで情報をお寄せいただかなかった方々からのご連絡もお待ちしております。どうぞよろしくお願いいたします。　　ASLE-J　広報委員　喜納育江、大野美砂、河野千絵

寄贈図書

次の図書を学会に寄贈していただきました。ご寄贈くださいました皆様、誠にありがとうございました。お読みになりたい方にはお貸ししますので、事務局までご連絡ください。なお、送料はご負担ください。

多田満著『レイチェル・カーソンに学ぶ環境問題』東京大学出版会、2011年。
日本ポー学会Newsletter編集部編『Newsletter』 No.8、2011年。
エコクリティシズム研究会『エコクリティシズム・レビュー』No.4、2011年。
伊藤詔子監修、横田由理他編著『オルタナティヴ・ヴォイスを聴く―エスニシティとジェンダーで読む現代英語環境文学103選』音羽書房鶴見書店、2011年。

書誌情報

Clark, Timothy. The Cambridge Introduction to Literature and the Environment. Cambridge U.P, 2011.
Oppermann, Serpil, ed. The Future of Ecocriticism: New Horizons. Cambridge Scholars Publishng, 2011.
伊藤詔子監修『オルタナティブ・ヴォイスを聴く』音羽書房鶴見書店、2011
尾関周二他編著『〈農〉と共生の思想－農の復権の哲学的探究』農林統計出版、2011
喜納育江『〈故郷〉のトポロジー』水声社、2011年
笹田直人編著『〈都市〉のアメリカ文化学』ミネルヴァ書房、2011
管啓次郎、小池 桂一『野生哲学－アメリカ・インディアンに学ぶ』講談社、2011
多田満『レイチェル・カーソンに学ぶ環境問題』東京大学出版会、2011
野田研一編著『〈風景〉のアメリカ文化学』ミネルヴァ書房、2011
波戸岡啓太『ピンチョンの動物園』水声社、2011
山里勝己編著『〈移動〉のアメリカ文化学』ミネルヴァ書房、2011

事務局より

＜2011年度ASLE-Japan ／文学・環境学会全国大会総会のご報告＞

2011年８月27日（土、12：30 ～ 13：30）に、明治大学生田キャンパス（神奈川県川崎市多摩区東三田１－１－１）中央校舎６階メディアホールにて、2011年度総会が開かれました。まず、審議事項として、2010年度会計および監査報告、2011年度予算案、役員改選案、次年度全国大会案、ニューズレターへの広告掲載に関する案、会費未納者の扱いに関する案、海外出版社からの論文再掲載許可要請への対応に関する案について担当役員より説明があり、審議を経て了承されました。続いて、2010年度活動内容、会誌・ニューズレターの発行、現会員数（177名）、ASLE-Japanホームページにおける「環境文学用語集」公開と「会員書誌情報」更新についての報告がありました。その他、東日本大震災を受け、会としては被災者の年会費免除という形で支援姿勢を示していくこと、また、復興支援を目的とした書籍『ろうそくの炎がささやく言葉』（管啓次郎ほか共編著、勁草

成美堂研究図書案内

世界文学史はいかにして可能か *New Literaly History* Vol. 39 No. 3 2008	木内徹・福島昇・西本あづさ監訳 A5判並製・376頁	定価3,675円 （税込）	*New Literaly History* Vol. 39 No. 3 2008 の翻訳。グローバリゼーションによって変容した「世界文学」という概念をめぐる批評の試み。
アメリカ文学と戦争 – American Litterature and Warfare –	依藤道夫(編)・小倉いずみ・古屋功・依藤朝子・滝口美佳・花田愛共著　A5判上製・276頁	定価3,465円 （税込）	本書はアメリカの文学と文人たちが戦争というテーマといかに取り組み、それをいかに描き出してきたかを考察する。
シェークスピア劇の傍白 – Modest Doubt –	内藤健二著 4/6判上製・140頁	定価1,890円 （税込）	傍白の研究を、セリフが誰に向けられたものであるかを出発点として捉え、傍白の分類に至っている。シェークスピア研究の基盤を震撼させる、問題提起の書である。
シオドア・ドライサーの世界 アメリカの現実　アメリカの夢	岩元巌著 4/6判上製・288頁	定価2,940円 （税込）	長年にわたって現代アメリカ文学を研究してきた著者がドライサーの全小説を論じつつ、彼の生涯の体験をあわせて、その世界を再構築しようとした力作である。
テクストの内と外 – Inside and Outside the Text –	東海英米文学会編 A5判上製・240頁	定価2,500円 （税込）	東海英米文学会の 20 周年記念論集で、文学テクストの内在的研究と外在的研究 19 編を収録。

他にも多数研究図書を扱っております。
研究図書の自費出版承っております。
詳しくは以下のURLへアクセスしてください。
https://www.seibido.co.jp/g00/g0000000.htm
SEIBIDO
〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-22
TEL.03（3291）2261　FAX.03（3293）5490

書房、2011年）を全国大会会場にて販売することが報告されました。なお、今回の総会およびそれに先立つ役員会では、この２年ほど大幅な歳出超過の傾向があり、そうした会計実態の改善に向けた対策をとる必要性も指摘されました。

＜2012年度ASLE-Japan ／文学・環境学会全国大会を近畿大学にて開催します＞

来年度の全国大会は、辻和彦委員を大会実行委員長とし、2012年８月31日（金）～９月２日（日）の日程で、近畿大学にて開催することとなりました。

と　き：2012年8月31日（金）～9月2日（日）
ところ：近畿大学（東大阪市小若江３－４－１）
※プログラムの詳細については、確定次第、会員メーリングリストやASLE-Japanホームページにてお知らせいたします。

2012年度全国大会での研究発表、ラウンドテーブル、シンポジウムを募集します。
タイトル、発表要旨（800字程度）、連絡先を辻和彦大会実行委員長（近畿大学）までお送りください。
送付先：〒577－8502　大阪府東大阪市小若江３－４－１　近畿大学文芸学部　辻和彦研究室
締　切：2012年４月25日（水）

＜会費納入のお願い＞

2011年６月発行のNewsletter　No.30 に添えて、会費納入のお願いをいたしました。会費未納の方は、至急、下記郵便口座へお振込みください。（一般5,000円、学生2,000円）

口座番号　01300－0－93821
加入者名　文学環境学会（フリガナ：ブンガクカンキョウガッカイ）

＜会員名簿情報の訂正・更新について＞

会員の皆様へ、事務局より改めてお願いがございます。名簿掲載事項【氏名・連絡先住所・電話番号・メールアドレス・所属・研究分野】に変更がございましたら、すみやかに事務局補佐・高橋（tayako@vos.nagaokaut.ac.jp）まで直接ご連絡ください。事務局としては、ご本人と名簿管理担当者とが直接やりとりをすることで正確な情報管理をしていきたいと存じます。なお、次回の会員名簿作成は、2012年度となります。入退会にともなう新規情報追加や旧情報削除、および、今後の名簿掲載事項変更につきましては、2012年度会員名簿にて反映させていただきます。

ご協力の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。

編集後記

今回は新たにニューズレター編集委員メンバーの入れ替えもあり、どたばたの中での作業でした。ただ会を支えて下さる多くの会員の方々が寄稿して下さり、おかげさまで何とか無事に発刊にこぎつけました。この場を借りて、心から感謝申し上げます。

「環境」にとって、「文学」にとって、この経済／国際／社会状況は、圧倒的に逆風ばかりのように思えます。しかしながらその中でも、ASLE-Jが存在し続け、このようなニューズレターが発行し続けてられるのは、ひとつの驚異のように思え、また過酷な世界におけるひとつの「良心」の存続のようにも感じられます。そうであるならば、私達のささやかな仕事は、嵐の中でこの蝋燭のともしびを守り続けることなのでしょう。願わくば、この光がこの世界の闇間を僅かでも照らし出しますように。（編集委員一同）

ASLE-J

【発　行】
代　表：村上清敏
事務局：札幌大学　豊里真弓
〒062-8520
札幌市豊平区西岡３条７丁目３番１号
Tel ／ Fax: 011-852-9617（直通）
E-mail:toyosato-m@sapporo-u.ac.jp

【編　集】
編集代表：辻　和彦
〒577-8502
大阪府東大阪市小若江3－4－1
近畿大学文芸学部
E-mail: twain1910@gmail.com